

はじめに

京都産業大学 タンパク質動態研究所長

永田 和宏

京都産業大学にタンパク質動態研究所が発足してから二年が経過した。この間、個々の研究室における研究は順調な進展を見せ、ここに年報としてその成果報告をできることは大きな喜びである。

生命活動の根幹を担うタンパク質研究に特化し、タンパク質の動態を「時間軸」「空間軸」そして「組織化」という3つの視点から総合的に研究するとする、本学タンパク質動態研究所の創設は、わが国のみならず、国際的にも大きな注目を集めた。海外から3名、国内から2名のきわめて著名な招聘客員教授を迎えることができたことは言うまでもなく、本年からは、吉田賢右、伊藤維昭リサーチフェローを研究所のフェローとして迎えることができたこともありがたいことであった。吉田、伊藤両先生が、長くわが国のタンパク質研究を牽引して来られたことは、あらためて言うまでもないが、5つの研究室だけでなく、一私学として、これだけの陣容を揃えた研究所は、ほとんど例がないだろうと自負している。

このような背景を含め、本年度は、タンパク質動態研究所が中心になって応募していた「私立大学研究ブランディング事業」に採択されたことも、本研究所の歩みに弾みをつけてくれることになった。学長の口からは、折りに触れ「本学の研究の中でも強みであるタンパク質研究」という言葉をよく聞くことがあるが、その意味でも、タンパク質研究がブランディング事業として認められたことは、この方向性の妥当性を示唆しているものと受け止めている。

また来年度(2018年8月26～29日)には、本研究所と新学術領域研究「新生鎖の生物学」(日本学術振興会)の共催事業として、国際会議「Proteins: From the Cradle to the Grave」が、比叡山延暦寺において開催されることになっている。すでに海外からの招聘演者、参加者を含め、国内からの多くの参加者が集まりつつあり、その成功を心待ちにしているところである。

本年報においては、昨年は5人のPIによる座談会を行った。年報にこのような座談会記事を掲載するのは、比較的珍しいことと思われるが、研究の中心になるPIが、どのような思いで研究に取り組んでいるかを示すことができたと考えている。それに続いて、本年の年報においては、本研究所で研究を続けている若手研究者たち、博士研究員や大学院学生たちによる座談会が持たれ、その記録が載ることになっている。これも年報としては異例の記事だと考えているが、まさに最前線で日々研究にいそしんでいる若手研究者の本音が聞けるものと楽しみにしている。

また本年報においては、長年発生生物学領域において、世界的な研究を展開してこられた近藤寿人先生による、自伝とも言うべき研究の歴史を執筆いただいた。一人の研究者が、時に迷いながらも、長年の研究をどのような思いで続け、そして大きな成功を収められたのか、そこにはどのような信念と、冒険と、そして喜びがあったのか、それらを若手の研究者にぜひ知っていただきたいという思いからである。

研究の最前線で活躍する若手の研究者、大学院生が、研究に本当の喜びを見いだせる場であり続けられるよう、努力を傾注することが、本研究所の成功につながるものであると確信している。本年報は、単なる報告書ではなく、これら二つの記事からも明らかのように、若い研究者に自信と希望と野望を持ってもらうための冊子であって欲しいと願っている。